

## ピリピ人への手紙1章1-18節 「喜びの手紙」

### 1A 感謝の祈り 1-11

1B 教会の人々への挨拶 1-2

2B 福音の働きへの交わり 3-7

3B 知識と識別力のための祈り 8-11

### 2A 福音の前進 12-18

1B 親衛隊に知られた福音 12-14

2B 妬みによる宣教さえ喜ぶパウロ 15-18

## 本文

ピリピ 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、エペソ書からピリピ書に入ります。エペソ人への手紙も、ピリピ人への手紙も、どちらもパウロが、ローマで軟禁状態のところから書いています。それぞれの手紙が、驚くべき内容です。エペソ書では、パウロが牢に入れられているのに、キリストにある者はいかに富んだ者であるかを語っていました。そして、神の大能の力が信じる者にいかに働いているかも教えていました。人間的には、苦しみと貧しさがあり、また鎖につながれているのですから、弱い、拘束された状況なのに、キリストにあっては全然違うのだということを話していましたね。

ピリピ書も、キリストにある者がいかに、今の自分たちの状況の見方を変えてしまうかを教えています。パウロは、この手紙で新改訳の聖書では 13 回、喜びとか、喜ぶという言葉を使っています。パウロが鎖につながれているだけでなく、ピリピの人たちも苦しみの中にいました。しかし、福音が第一になっていること、キリストが第一になっていることで、その他のことは、大事だけれども、それほど大事なものではなく、神が確実にみこころを行っておられることを、パウロは見ることができています。そのキリストの福音に生きるところに、いつまでも溢れる喜びがあります。そして、その喜びこそが、自分自身を支える、救いの源なのだということもわきまえています。この手紙から、多くのことを学べると期待できますし、喜びの力を体得できるでしょう。

そしてピリピ人への手紙には、もう一つの大きな主題があります。私たちは、教会がキリストのからだであり、キリストにあって私たちに平和があり、一つになっていることを学びました。ピリピの教会の中で、苦しみや試練がある中で、指導的な働きをしている女性二人が意見の対立を先鋭化させてしまって、教会の一致が乱れているという問題がありました。キリストのからだの一つであることを頭で分かっていることと、御霊によってその一致をしっかりと保つことには大きな開きがありますね。エペソ書で習った教会の一致を、どう保っていけばよいか、その具体的知恵を見ていきます。

## 1A 感謝の祈り 1-11

### 1B 教会の人々への挨拶 1-2

<sup>1</sup> キリスト・イエスのしもべである、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。

「キリスト・イエスのしもべ」と自分とテモテのことを話していますが、午前礼拝で話しましたように、他の手紙では、「使徒」であることを強調していました。けれども、そういったことはあまりにも当たり前にピリピの人たちは知っており、パウロは兄弟として、友人として彼らに手紙を書いているのです。けれども、「しもべ」という言葉で自分のことを言い表しています。ドューロスというギリシア語で、奴隷の中でも全く自由のない、主人の所有となった者であります。つまり、イエスを自分の主人として、私はこの方にすべて明け渡された者であり、この方の命令に従うことが自分の命そのものである、という告白であります。自分ではなくキリストとなっている時に、キリストのゆえに自分がなくなっている時に、喜びがあふれ出てくると言ってもよいでしょう。

そして、「ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち」と言っています。パウロにとってピリピの町は、特別なところでありました。彼が、マケドニア人が助けてくれと呼ぶ夢を見て、アジアからヨーロッパに宣教に入った初めての町だからです。ピリピの町について、ルカは使徒の働きで、「16:12 この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。」とあります。ピリピは、ギリシアの王アレクサンドロスの父であるフィリップスにちなんで名づけられましたが、ローマ帝国初代皇帝であるアウグストゥスが、ここをローマの植民都市として、他の都市よりもまさる特権を与えました。植民都市は、退役軍人が多く住み、すべての住民がローマ市民権を持っており、自治を持ち、税は免除されています。都ローマに倣ったモデル都市です。

そこにパウロたちが足を踏み入れて、安息日に、シナゴーク、ユダヤ人会堂に行くのがいつものことでしたが、ピリピにおいては、「16:13・・・私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。」とあります。なぜかと言いますと、ユダヤ教では町にユダヤ人の大人の男性が最低十名いれば会堂、シナゴークを持つことになっていたのですが、そこには十名もいなかったことを示しています。それだけ、ローマ色の強い町であったことが分かります。けれども、そこで異邦人でありながら、ユダヤ教に魅かれていた、神を敬うリディアという、紫布の商人がいました。彼女の心を主が開かせてくださり、彼女はパウロを家に招き、それで彼女と家族の者たちがバプテスマを受けます。

そして、占いの霊に付かれていた女がパウロたちの後ろにいて、叫んでいました。パウロは、彼女から占いの霊を追い出しました。すると、その占いによって金を儲けていた者たちがパウロと相棒のシラスをローマの役人の前に引き出して、このように訴えます。「16:20-21 そして、二人を長官たちの前に引き出して言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、ローマ人で

ある私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」ローマ人ではない、ユダヤ人に対する嫌悪が濃厚にただよっていたことを伺わせます。

そしてパウロとシラスは牢屋に入れられました。その時に鞭で打たれています。けれども、子の二人は何と夜に、「16:25 祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていた。」とあります。そうです、鞭打たれて、背中が激しく痛んでいたはずの時に、彼らは祈り、賛美の歌をうたっていました。パウロとシラスは、この手紙にあるように、主にあって喜び、感謝しています。そして、大地震が起こり、牢の扉が開き、その看守は自害しようとしたが、パウロが止めて、「使徒 16:31 主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言いました。そしてその看守と家族がバプテスマを受けました。こうして教会が誕生しました。

そして、機会があれば、ピリピの人たちはパウロに贈り物を送っていました。この手紙を書くきっかけになったのも、エパフロデイトという働き人をピリピからローマに遣わして、彼がその贈り物を届けたからです。パウロは、ピリピを離れてから、テサロニケにいた時に、一か月ぐらいしかいなかった時に、二度も彼らから受け取っていました。そして、マケドニアを離れてからも、ピリピの人たちは送り続けました。コリント人への第二の手紙で、マケドニアからの人々がやってきて、私の欠乏を補ってくれたと言及しています(11:9a)。そして、パウロが第三の宣教旅行をしている時、その目的の一つに、異邦人主体の教会から、貧しいユダヤに在る兄弟たちに支援金を募っていた時に、ピリピの人たちは自分たちが困窮していたのにもかかわらず、彼はおそらく断ったでしょう、それでも惜しみなく献げたのが彼らでした(Ⅱコリ 8:1-5)。

そのような中で、パウロとピリピの人々には、兄弟愛があり、使徒と信者という関係よりも、友人としての関係があったように思われます。

それで、「キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち」と言っていますが、「ならびに監督たちと執事たちへ。」とも言っています。これは、先に話しましたように、監督や執事のような教会の指導者の女性二人の間に、意見の対立があって、教会全体が揺れていたからです。彼らに対して、一致へのお願いをしています。監督というのは、その名のとおり全体の監督です。そして執事は、元々、給仕をする者として、エルサレムの教会で七人の人たちが選ばれましたが、教会におけるいろいろな雑事と呼んでよいのかわかりませんが、そうしたことに仕える人々であります。けれども、雑事ではなく、主にあってはすべて貴い仕事です。みことばを取り次ぐ、賛美を導くのと全く変わらない、主の前では大きな働きであります。

<sup>2</sup> 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロのどこの教会への手紙にも使っている挨拶です。恵み、カリスはギリシア人の挨拶言葉。

平安は、シャロームでユダヤ人の挨拶言葉です。二つがキリストにあって一つになっています。それから、恵みがあってこそその平安です。恵みを知らない人は、いつも状況が変われば揺れ動いてしまいますが、平安は恵みによってもたらされます。

## 2B 福音の働きへの交わり 3-7

<sup>3</sup>私は、あなたがたのことを思うたびに、私の神に感謝しています。<sup>4</sup>あなたがたすべてのために祈るたびに、いつも喜びをもって祈り、<sup>5</sup>あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにも携わってきたことを感謝しています。

パウロは、祈りの生活が豊かでした。あれだけ忙しく福音を伝える働きをしているのに、いつ祈れるのか？と思いますが、イエス様は夜を明かされるまで祈られていましたね。そのことを真似していたかもしれないし、パウロは宣教の旅で、おそらく歩いて動いていたことでしょう。また船も使っていました。多くの時間があります。その時に、ピリピの人たちのことを思えば、感謝が沸き起こって来て、それで神さまに感謝の祈りを献げていたのです。

それだけでなく、ピリピの教会が生まれてから、彼らが一貫して行ってきたのが、先ほど話した贈り物です。最初の日から、つまりテサロニケに移った時から、今日、ローマで投獄されているところまでずっと、贈り物を持ってきていました。そこで、午前礼拝でお話したように、「福音を伝えることにも携わってきた」ということです。福音の働きをしているパウロを支えることは、そのまま福音の働きに携わっている、交わっているということです。

<sup>6</sup>あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。

このように良い働きがあるということは、これは神から来ているものであり、キリスト・イエスが戻って来られる日までに完成されるとパウロは確信しています。イエス様は、畑の喩えを多く語られました。種がまかれて実が結ばれて、収穫されます。主が戻られる時に、必ずその収穫でピリピの人々は報いを受ける、ということです。

<sup>7</sup>あなたがたすべてについて、私がこのように考えるのは正しいことです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人たちであり、そのようなあなたがたを私は心に留めているからです。

なぜ、パウロはわざわざ、「このように考えるのは正しいこと」と確認しているのか？それは、その良いわざが、いつでも苦しい時にも一貫して行われていたことでもあります。試されても、そこには彼らの良いわざが試金石のように残っています。投獄されている時にも、送っていたのです。そし

て、福音を弁明し、立証している時もそうでした。変わらず、支援していたのです。ヘブル人への著者も、ユダヤ人信者たちの示した愛を思い出して、こう言っています。「6:10 神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」主は、必ず救いの完成の時に、その愛の行いを忘れることはなさない、とされています。

ところで、献げることは、「恵みにあずかった」という言い方をパウロはしています。神の恵みは、一方的なものです。私たちが一方的に神から与えられたのですから、その恵みの中にいる者は、一方的に惜しみなく献げることによって、恵みとは何かを深く知っていきます。ですから、献金など、私たちは、神から取られているなどと思いません。むしろ、感謝の献げ物であり、お返ししています。その恵みを、パウロが共に彼らと受けているので、そこにある不思議な結びつき、兄弟愛があるのです。これが、私たちが献げる時の醍醐味です。交わりと神の恵みなのです。

### 3B 知識と識別力のための祈り 8-11

<sup>8</sup>私がキリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、その証しをしてくださるのは神です。

今、言いましたように、パウロには特別な愛、彼のことを慕う心があります。そして、「その証しをしてくださるのは神です」と言っていますが、しばしば預言において、神は、天や地を証言にしたり、法廷で弁明したり、立証したりする時の語り口になります。同じように、これは真実であることを伝えるために、神が証ししてくださると言っています。

言い換えると、それだけ、彼の祈りが人前でのものではなく、秘められたところ、だれにも知られないところで祈っていたということがありますね。イエス様が山上の説教で言われたように、奥まった部屋で祈っている時は天の父が見ていてくださる、ということです。

<sup>9</sup> 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、<sup>10a</sup> あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。

愛というものに、「知識とあらゆる識別力」によって、その愛が豊かにされていきます。おそらく、これは、ピリピの教会にある、二人の女性指導者の対立について話しているのだと思います。キリストのゆえに、福音のゆえに互いに受け入れ合い、相手を敬うという姿勢が必要です。これは次回以降、パウロが語り始めますのでそこで学びましょう。こうした知識や識別力が必要です。私たちキリスト者は、とかく「愛」を語りますが、知識が識別力がないために、むしろ愛が冷えて行ってしまう、愛に真実さが伴っていないことがあります。ですから大切なことを見分ける力が必要です。

<sup>10b</sup> こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、<sup>11</sup> イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。

パウロは再び、キリストの日について言及しています。彼の信仰には、イエス・キリストがすぐに来られるというものがありました。それで、この方が今の働きを完成して下さるし、またこの方が私たちを裁かれることも知っていました。裁くといっても、罪に定めるのではなく、報いを与え、賞を与えるという意味での裁きです。私たちの教会が、いやすべての教会がそうであるべきですが、礼拝の時に、賛美の時に、みことばにおいて、また祈りにおいて、主が間もなく来られることを信じ、受け入れ、告白していくべきです。

そこで、「純真で非難されるところのない者」となることが必要だということです。主が来られるのですから、その備えが、第一に純真さです。これは、文字通りには「上塗りをしていない」という意味合いになります。表はきれいになっているけれども、中身は全然違うというようになってはいけません。いろいろな困難があると、相手をよく思っておらず、自分のことばかりを考えていたら、偽りの信仰生活になってしまいます。イエスを敬っているから、こうこうしているのだと言いながら、やっていることは肉の行いだったりします。これが偽りです。そういったものから自由になっているのが、純真ということです。

そして「非難されるところのない」というのは、罪を全く犯さないということ以上に、世において非難されることがないというような意味です。社会性があるというか、世の中は争いが多いですが、ここには、教会には平和があるというのが証しですね。ところが、教会に来て争いがあれば、何だ、結局、我々の世界と変わらないではないか？と思われてしまいます。

それから、「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて」とあります。義が実として表現しており、そして、イエス・キリストによって与えられる、ともしています。私たちの律法の行いの義ではなく、主が戻って来られる時に与えられる義のことです。「ピリ 3:9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。」しかし、同時に、主が来られるまでの間、イエスのうちに留まって、多くの実を結ぶということも、主ご自身が約束されています(ヨハネ 15:5 参照)。そして、イエス様がしばしば語られましたが、ご自身は父の名によって来た、ということです。イエス様のくださる義に満たされると、それはそのまま父なる神の栄光と誉れになります。

## **2A 福音の前進 12-18**

### **1B 親衛隊に知られた福音 12-14**

<sup>12</sup> さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったことを知ってほしいのです。<sup>13</sup> 私がキリストのゆえに投獄されていることが、親衛隊の全員と、ほかのすべての人たちに

明らかになり、<sup>14</sup> 兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことで、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆にみことばを語るようになりました。

パウロが、福音の働きに共に恵みにあずかっている仲間に対して、このことを話すのが、とてつもなくうれしかったでしょう。今、パウロが、ローマで囚人として鎖につながれています。エペソ人への手紙でもそうでしたが、彼は、決して、普通、人が見るように自分自身を見ませんでした。何度も何度も、福音のゆえに鎖につながれていることを話しています。「エペ 6:20 私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」彼は、鎖につながれながらも、使節、つまりキリストの大使としての務めを果たしているとみなしていたのです。ここは、彼に示されていた、はっきりとした神のみこころだったのです。

イエス様が、何度となく弟子たちに語られていたことを思い出してください。「マタ 10:18 また、あなたがたは、わたしのために総督たちや王たちの前に連れて行かれ、彼らと異邦人に証しをすることになります。」まさに、このことが自分に起こったと、少なくともカイサリアにいたころから気づいていたことでしょう。彼は、エルサレムに行ってからローマに行かなければいけないと思っていました。ローマ人への手紙に、彼らのところに行くことが自分の願いであることを述べています(1:10)。これを書いていたのはコリントですが、それから彼はエルサレムに戻ります。福音宣教者としていくつもりですが、しかし、エルサレムで証しを立てたら、異邦人に対する宣教を少し触れたら、聞いていたユダヤ人たちが騒ぎ立て、それでローマの千人隊長がパウロを保護、また拘束して、カイサリアに連れて行ったのです。そこで公正な裁判を受けるということになっていましたが、結局、ユダヤ人の歓心を買いたい総督が、パウロを政治の道具にしていると気づき、彼はカイサルに上訴することを決めました。彼はローマ市民なので、その権利があります。

その後で、総督フェストゥスは、ガリラヤの領主ヘロデ・アグリッパ二世に頼んで、何か訴えるべき事柄を見つけることができるように、彼の弁明を聞いてくれないか？と頼みました。そこでパウロは、目の前で彼がキリスト者になるかどうかまで迫るような、福音の弁明をするのです。そしてパウロは、他の囚人たちと共にローマに行くために船に乗りました。ところが暴風に見舞われて、死にかけました。しかし、主はパウロに、船は破壊されるが、人の命は救われると示されて、そのことを語り、パウロは看守である百人隊長の信頼を得ました。そしてマルタ島に漂流して、それからローマに向かいます。

彼は、鎖につながれているものの、途中から比較的自由が与えられていて、家で軟禁状態になっていました。そこで、多くの人々に、神の国を宣べ伝えていたのです。「使徒 28:30-31 パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」彼は、ローマに

行きたいと思っていたものの、まさか囚人として来るとは思っていなかったでしょう。けれども、そのおかげで、自由に福音を家の中で宣べ伝えることができたのです。

しかも、今、読んだ箇所によると、鎖につないでいる看守であるローマの親衛隊の人々の中からイエスを信じる者が起こされているのです！そして、皇帝の前に出たら、皇帝の前でキリストを証しすることができます。これがパウロの話している「福音の前進に役立った」ということです。私たちは、自分のしていることが妨げられるようなことが自分の身に起こります。制限が大幅にかけられる時があります。その時に、いかに主がそのことも用いて、ご自分のみこころを行われようとしているのかに気づくべきですね。

そのために必要なのは、次回見ていきますが、「1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」という、キリスト第一の姿勢です。キリストとその福音のためならば、他の事柄は二の次、死ぬほどの重要ではないこと、ということが言えます。この生きる姿勢が身につけているならば、一見、逆境に見えることも、実は前身しているのだと見ていくことができるのです。

## 2B 妬みによる宣教さえ喜ぶパウロ 15-18

<sup>15</sup> 人々の中には、ねたみや争いからキリストを宣べ伝える者もありますが、善意からする者もあります。  
<sup>16</sup> ある人たちは、私が福音を弁証するために立てられていることを知り、愛をもってキリストを伝えていますが、<sup>17</sup> ほかの人たちは党派心からキリストを宣べ伝えており、純粋な動機からではありません。鎖につながれている私をさらに苦しめるつもりなのです。

パウロが牢に入れられたということは、ローマやその周辺のキリスト者たちには、大きな衝撃と悲しみ、落胆があったことでしょう。しかし、実は福音が牢から広がっているということを聞き、元気づきました。それで、困難や反対があっても、それで大胆に福音を宣べ伝えるようになったのです。パウロが囚人となったことが、かえって、福音が広がっているきっかけとなりました。しかし、それはすべてが純粋な動機から行っているのではない、ということが、人間的な言い方をすると、手放しに喜べないということなのです。純粋な動機から、善意から、愛をもってしている人たちもいるのですが、党派心から、パウロを苦しめるために宣べ伝えている人々もいる、ということです。

おそらく、パウロの宣べ伝えている福音に反対している、異なる教えを説いている者たちに、影響を受けた人々のことを話しています。この手紙の中に、恵みの福音とは異なる、両極の教えをしている者たちを警戒しなさいと、パウロは教えています。一つはユダヤ主義者です。ガリラヤ地方の諸教会に入り込んで、とんでもないことになってしまっ、パウロも困り果てて書いたのが、ガラテヤ人への手紙ですね。パウロは、ユダヤ人であるが、ユダヤ教の教えや慣習を壊すように教えていて、エルサレムにおける使徒たちの教えと別の教えをしていると、吹聴していたのです。ユダヤ教が教えるように、異邦人は、イエスを信じるだけでは足りないのだ。改宗者になることによって、

初めて神の国に入れるのだとしていました。だから割礼を受け、諸々の律法を守りなさいと教えていました。そういった教えに影響を受けた人々が、パウロが牢に入れられたのを聞いたら、これとばかりに、熱心に、自分たちについてくる者たちを増やしていったのです。おそらく、それほど割礼を強調していなかったと思います。けれども、動機としてパウロではなく、自分たちに引き寄せるために福音を語っていたのです。もう一つは、恵みによるのだから、肉の欲について何をしても許されるという教えをしている者たちがいました。難しい言葉で、無律法主義と言いますが、これも偽りの教えですね。

<sup>18</sup> しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでます。そうです。これからも喜ぶでしょう。

これがすごいことです！パウロは、自分自身がキリストの恵みによって守られるために、自分自身を通して、神が救いを完成させる働きをしていることを知っていて、そのためには、キリストが宣べ伝えられているというところに焦点を合わせることが知恵なのだ、と知っていたのです。そのことのゆえに、喜んでいました。

パウロの評判は、牢に入ったことによって落ちています。人間的に考えれば、パウロが解放されてから、彼の福音宣教に妨げになるのではないかとと思います。けれども、福音が宣べ伝えられているということに彼は注目していったのです。そのこと自体は悪であっても、主はそれを善に帰られる力を持っていると、彼は知っていたのです。パウロには、自分自身がありませんでした。彼には、キリストがあがめらえることがあれば、自分のことはどうでもいいと思ったのです。そのようになかなか、思えないものです。どうしても、自分中心に物事がうまくいってほしいと願っています。けれども、パウロはキリスト中心なのです。

そして、そこに喜びの源泉があります。喜びがどんどんパウロから出ていますが、それは、確かに、神の国が広がっているからです。それを見る目が与えられていたからです。私たちにとって辛いことがあります。制限されることがあります。けれども、その困難な中においても、なおのこと神は勝ち誇り、凱旋の行列に私たちを招き入れてくださっているのです。